

説教 『契約が混迷を治める』山本 護 牧師
聖書 創世記 9：8～17／ルカによる福音書 2：22～32

調べものをしていて、つまらぬ事が目の端に入り脇道へそれ、目的から遠ざかってしまう経験は誰にもあるだろう。そんな道草読書の正月、詩人鮎川信夫の一文を書棚奥から引っ張り出した。

敗戦、軍隊帰りの若い鮎川は、「彼の全人格は、過去の一切によって形成されてゐるといふ以上に、在るものよりも在るべきものの現在形によって存在しつづけるのである(純粹詩 1947)」と著した。引用すると難渋だが、要するに「今」は、過去の結果である以上に、向かうべき未来によってこそ具体的になる、といった意味あいだと思う。つまり未来が「今」をつくっていくという視点だ。

この「今」に首肯しつつ、昔々の物語を読んだ。洪水が終息すると、神はノア一族に語る(創世 9:8)。「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる(9:9)」。それから念を押すように、「契約」はくり返され(9:10,12,13,15,16,17)、それがいかに重要かが分かる。契約は人類に限らず、全被造物との間で、しかも永遠に立てられる(9:16)。契約の内容は「肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない(9:15)」というもの。しかし人間は契約を軽んじ、「滅ぼされぬ」約束が不都合になるとこれを破棄した。そのもっともたるものが戦争と環境破壊。契約は「後に続く子孫(9:9)」、つまり私たちとも立てられている。だから「今」を、契約なしに「在るもの」とするのではなく、神が念を押して約束された「在るべきものの現在形」にしたい。それが神に従う者の身の処し方ではないのか。

長男の幼子イエスを聖別するために、両親は神殿へ連れて行った(ルカ 2:22~23)。そこで聖霊に満たされた老シメオンと邂逅する(2:25~27)。シメオンは幼子イエスを抱きかかえて神を讃え、「わたしはこの目であなたの救いを見た(2:30)」と述べた。しかしながら、キリストの言葉や奇跡は未だ現れていない。十字架と復活以前の段階で幼子イエスのことを「異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです(2:32)」と預言し、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます(2:29)」と祈った。シメオンは、救いの到来に立ち会えずとも、その根源に巡り会えただけで充分だと。私たちも御国の到来には間に合わないかもしれない。だが十字架はすでに起こっており、やがて来るべき御国によって、私たちは今「在るべきものの現在形」に整えられている。

「雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める(創世 9:16)」。世の混迷を象徴する洪水、そして全生物が共棲する虹の約束。虹=rainbow、「雨(天)なる弓」。古代のヘブライ人はもとより、多くの部族が虹を「神の弓」と見なしている。それにしてもなんと荘厳な武器であろうか。天なる神の弓が、地に架橋されて調和が実現するイメージ。このイメージを抱いて、今、自らを「在るべきもの」にしようではないか。

人間の計らいでは洪水(世の混迷)を治めることができない。神はその混迷に目を留め、「地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた(8:1)」。今も風(ruah 霊)は吹き、地を吹き抜ける霊によって混迷は治められだろう。洪水の岬の突端で私たちは、霊の風に吹かれて「在るべきもの」になっていく。



【おまけのひとこと】

森にひきこもってはいは分かるまい 岬の突端に立ち 優しい朝風を頬に感じてみよ 聖霊は世を吹き抜けている 嵐であれば出帆は控えよう 季節風であれば紆余曲折は堪えられる程度になろう